

ていることからみて、(16)の「御形」は朝倉義景の嫡男阿君(当時六歳)に比定される。

(17)は墨痕明瞭であるが、三字目の字画が判然とせず難読である。

当時は割合「か」と「くわ」の表記が使い分けられていたようであるから、記載内容の可能性として「罐子」「巻数」は難しい。むしろ監寺(カソゾ・カソス)ではないかと考えられる。

(22)の「はし」の裏面には上部に一文字分の墨痕があることが確認された。また朝倉館跡の調査報告書にのせる付札23には、墨書の存在は確認されなかった。

なお今回報告した二二点の付札のうち、(14)(17)(18)は水漬状態であるが、他はすべて保存処理がほどこされ、墨書の跡もきわめて良好に保たれている。

今回の報告にあたり福井県立博物館の山形裕之氏のご高配をえた。

9 関係文献

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡V 昭和四八年度発掘調査整備事業概報』(一九七四年)
福井県教育委員会『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査』(一九七六年)

(佐藤 圭)

漢簡研究国際シンポジウム 開催さる

去る一九九一年一二月一二・一三の両日、関西大学において同大学東西学術研究所主催の「漢簡研究国際シンポジウム九二」が開催された。中国・台湾で漢簡研究に携わる九名の報告をもとにして、東洋史・日本史・書道史等の分野の研究者による活発な討論が展開された。

報告は以下のとおり。

徐莘芳「中国における漢簡発掘の現状」、初世賓「居延新簡の歴史研究に対する貢献」、岳邦湖「エチナ川流域漢代遺跡の現状」、邢義田「中央研究院歴史語言研究所所蔵居延漢簡整理工作簡報」、吳祿驥「敦煌馬圈湾出土漢簡の特色」何双全「漢簡中の符伝と過所」、李永良「敦煌漢簡中の西域史料の問題について」、彭浩「湖北省江陵出土漢簡概説」、李學勤「湖北省江陵張家山出土漢律竹簡」